北方謙三

われらが時の輝き

おまえは気がついてねえだろうが、
宮仕えの道から、どっかはずれちまってんだぜ。
いまさら、損も得もねえってことに、気がつかねえのか。
行き止まりまで、突っ走るしかねえのよ。
行き止まりでなんかにぶつかって、それを突き破れりゃ、
おまえも一端の男ってことだな。

北方謙三

われらが時の輝き

サラリーマンの本能のようなもので、
私は仲本と闘おうとしている。
出世したいというのが本能であれば、
確かに出世を賭けているといってもいいのだろう。

講談社

われらが時の輝き
昭和六一年一月一〇日　第一刷発行
定　価　一〇〇〇円
著　者　北方謙三
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話・東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大製株式会社
©北方謙三　一九八六年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
ISBN-4-06-202541-8（0）　（文2）

われらが時の輝き

装幀　江島　任
装画　高橋常政

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章

1

四人いた。

四人ともまだ少年だったが、二人は私よりも背が高かった。

「君らは？」

四人は笑っただけだった。私は落ち着こうとした。屈強な四人組に囲まれた、というわけではない。まだ髭もまともに生えていないような少年だ。

「通しなさい。いやがらせをして喜んでいると、補導されるよ」

正面の、百八十センチはありそうな少年が、噛んでいたガムを路上に吐き出した。

「虫のいいおっさんだな」
横から声が聞えた。金か、と私は思った。大した額は持っていない。この場合、都合がいいことかもしれない。たかる相手を間違えたということだ。
「二万も持ち合わせがないんだがね」
「二万だってよ、おい」
四人が笑い声をあげた。駅までそれほどの距離はないが、人通りのほとんどない路地だった。
私は、正面の少年の方にむかって踏み出した。いつまでこうしていても、埒があきそうもない。子供に囲まれて気遅れしている自分が、情けなくもあった。
少年が二、三歩退がった。次の瞬間、両側から腕を摑まれた。ふり払う暇はない。正面の少年の靴が、私の腹に食いこんできていた。
倒れはしなかった。両脇を支えられているからだ。痛みというより、息苦しさに似たものが、躰を走り回った。腕をふり払おうとした。後ろから蹴りあげられたようだ。背中。まだ立っていた。右腕を摑んでいた少年を、ふり回した。攻撃をかけたわけではない。逃げようとした。気持よりも、躰がそう動いていた。右腕を摑んでいた少年が、路上に膝をついた。脚を蹴りつけられた。少年ともつれ合うようにして、私は路上に倒れた。
蹴りつけてくる足から腕で頭を庇うようにして路上を転げ回る。それから、立った。大振りのパンチを、肩で受けた。大通りの灯が、チラリと視界を掠めた。そちらにむかって、走っていた。
追ってきたのは、笑い声だけだった。

駅の公衆便所で、服の埃を払い、手と顔を洗った。

苦い屈辱がこみあげてきたのは、都心にむかうガラガラの電車の座席に腰を降ろした時だった。いい大人が、子供にからかわれた。しかし、どこかにほっとした気分も入り混じっている。

躰に、痛みはなかった。私は腕を組み、眼を閉じた。頭の中で、少年たちの笑い声が反響した。眠れはしなかったが、降りる駅に着くまで、私はじっと眼を閉じていた。

泰子の声で眼が醒めた。

私はベッドから降り、パジャマのままリビングへ行った。テーブルにあった新聞を拡げる。週末の朝の習慣だった。朝といっても、十時はとうに回っている。

面白い記事はなにもなかった。プロ野球のニュースを詳しく読んだだけで、あとは見出し以外は読まなかった。

泰子が喋っているのは、電話機にむかってだった。噂、というより愚痴に近い。一度やりはじめると、二時間近く続くこともある。

ソファから腰をあげ、窓際に立った。六階だから、かなり遠くまで見通せる。ありふれた街並だった。といって、なにがどこにあるのか、眼をつぶっていてもわかるわけではない。いつも、漫然と眼をむけているだけだ。

郊外の団地から、このマンションに移ってきたのは、六年前だった。ローンはまだ続いているが、現在の私の収入ではそれほどの負担でもなくなった。もともと、半額近くを、頭金で払ってしまった

のだ。その頭金の足しにするために、泰子は団地の近くのスーパーで三年間パートをしていた。電話の無駄話をはじめるようになったのは、ここへ引越してきてからだ。

渋谷まで、電車で七、八分。通勤には便利な場所だった。郊外に一戸建の家を買うか、都心近くにマンションを買うか、しばらくの間迷っていた。泰子とも、そのころはよく話合ったものだ。

玄関で人声がし、久子が飛びこんできた。

学校は、という言葉を、私はかろうじて呑み込んだ。この四月に、ミッション系の私立中学に入ったばかりだ。土曜日は、私の会社と同じように休みだった。

久子は自分の部屋に飛びこみ、レコードを抱えてまた出て行った。

部屋でボリュームをあげるのを、うるさく言っている。近所に響いているのかどうかわからないが、リビングには大音響が流れてくる。それがうるさいと思う点では、泰子も私も同じだった。

私は、戸を開けてベランダに出た。多少広めのベランダで、プールサイドに置かれているような、小さなテーブルと椅子がある。

外は快い暖かさだった。椅子に腰を降ろそうとした時、私は背中に痛みが走るのを感じた。腿にも腹にも、痛みは残っているようだ。躰を動かすのが苦痛なほどではない。

風が、頬を撫でていった。下の道路の音は、ベランダに出ると意外によく聞える。その音にも、いつの間にか馴れてしまっていた。

口もとに手をやった。禁煙して、もう十ヵ月になるが、癖というやつはなかなか抜けないものだった。煙草をやめたのは、誰かに言われたためではない。流行に乗ったようなものだった。ジョギング

ウェアとスニーカーを買いこんで、早朝のトレーニングもやってみたが、ひと月も続かなかった。

躰は、健康だった。いつか健康でなくなるかもしれない、という漠然とした不安はあったが、さし迫ったものではなかった。健康法というのは、時間潰しのようなものだ。

ベランダに並べられた鉢植のいくつかが、小さな蕾をつけていた。去年どんな花が咲いたのか、まったく憶えていない。もしかすると、去年はなかった鉢なのかもしれない。花には蜂が飛んでくるから嫌いだ、と泰子に言ったことがある。こんなマンションのベランダにも、蜂は蜜の匂いを嗅ぎつけてやってくるのだ。泰子は、笑っただけだった。私も、なぜ蜂が嫌いかということは語らなかった。

まどろんでいた。二、三分だったのか、二、三十分だったのか、よくわからなかった。戸を開ける音で眼が醒めた。

「起きてたの」

泰子は、洗濯物の入ったポリバケツを抱えていた。私は、椅子から腰をあげた。じっとしていると、濡れたシーツが顔に貼りつきかねない。

乾燥機付きの洗濯機が備えつけてあるが、洗濯物は陽に当てなければならないと泰子は考えていた。蒲団も時折陽に当てているらしく、暖かくて寝苦しい時がある。

「何時だ？」

「十一時をちょっと回ったとこかしら」

「俺の服は？」

「待ってね。シャツを洗っちゃったから、新しいのを出すわ」

土曜の午後は、ゴルフ練習場と決まっていた。実際に練習しないこともあるが、とにかくバッグを担いで家を出る。

洗濯物で、視界を遮られた。私はソファに戻って、もう一度新聞を拡げた。社会面の、殺人の記事を読みはじめる。殺されたのが若い女だから、派手な記事作りになっているが、よくある振られ男の恨みだった。途中でつまらなくなって、テレビをかけた。チャンネルを回していく。ひと通り全部回してから、ワイドショーのところに戻した。税理士のような男が、節税法を図に描いて説明している。医者にかかった金はどうなるのか。出産の費用はどうなるのか。関心はなかった。税金を引かれた給料が、銀行に振込まれてくる。それに詳しく眼を通したことさえなかった。税金を払っているという気分になるのは、交通取締りで警官に横柄な口を利かれた時くらいのものだ。

シャツとズボンがソファに置かれた。

私は立ちあがってパジャマを脱いだ。背中に、泰子の手が触れてきた。

「どうしたの、これ？」

「痣か？　交通事故」

「ほんと？」

「自転車にぶつかった。むこうは倒れたから、俺よりひどそうだった」

「どこで？」

「すぐそこさ。知らないやつだったけどね」

「両方とも、酔っ払いね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「まあな」
シャツを着てボタンをかけた。泰子は、もう関心を失ったようだった。
「久子は？」
「友だちのところ。小学校の友だちで、横浜のミッションスクールに行った子がいるわけ。二人とも土曜が休みでしょう」
「昼めしも、そこで食ってくるのか？」
「サンドウイッチかハンバーガーでも買うみたい。うちへ来た時もそうしてるから。干渉されるのをいやがるのよ」
私は軽く頷いた。久子と、別段話をしないわけではない。用事があれば話す。その程度だ。小学校六年の時に初潮があり、胸も腹らんで大人っぽい躰つきになってきた。じゃれ合うには、抵抗がある。躰が触れたりするとこちらが照れてしまうのだ。風呂から出て、裸で歩き回っている久子を見ると、叱るよりさきに恥しくなり、寝室に逃げこんでしまう。一緒に風呂に入っていたのが、ついこの間だったような気がするが、成長をはじめた女の躰というのは早いものだった。
ゴルフバッグから、クラブを全部抜き出した。ボロ布で、シャフトとクラブヘッドのフェイスを拭う。特に念入りな手入れをするわけではないが、練習に出る前は必ずそうやって拭いておく。
「ちょっと早いけど、お昼にしない」
ダイニングキッチンのテーブルには、すでに料理が並べられていた。昨夜の残りものを温めただけらしい。

私は、磨きかけのクラブをバッグに収いこみ、テーブルについた。

利江は、まだ寝乱れた髪をしていた。眼のまわりだけ、薄く化粧をしている。

「いやだな。約束の時間より十分早いんじゃないの」

「道がすいてた」

「ちょっと待ってよ。頭をちゃんとしてくるから」

「構うなよ。土曜だぜ」

「まったく、いきなり電話してくるんだから」

利江の家は、都心からちょっと離れた場所にあった。私の家とは、同じ私鉄沿線だ。

四年前に、五十歳になる亭主と別れた。庭付き一戸建の家は、慰藉料代りというわけだ。若い娘と暮してるのよ。しかも、あたしがよく知ってる娘。あたしは高校生の息子を押しつけられてさ。

二人だけになると、どこか蓮っ葉なところがある女だった。それが鼻につくこともあれば、色っぽく感じることもある。

外では、服飾メーカーのデザイン室をひとつ任せられた、現役のデザイナーだ。挙止や言葉遣いが、男っぽく見えるといってもいいくらいだ。

私は、二階の利江の部屋から、狭い庭に眼を落とした。この家に来るのは、ひと月に一度か二月に一度くらいのものだ。普段は、都心のホテルで逢う。それが、きのう今日と続けて来ていた。

「緑がきれいでしょ」

寝室から出てきて、利江が言う。新緑の季節は、もう終ったところだ。庭師でも入れているのか、樹木はきれいに刈りこまれている。

「せっかく、休みだったのにな」

「なに？　謝ってるの？」

「身勝手かなと思ってさ」

「仕事が残ってる夜に呼び出される方が、ずっと迷惑よ」

「それはそうだな」

安楽椅子に腰を降ろした。利江は、ドアのところに立ったまま、まだ髪を気にしていた。後ろでひっつめているが、ほつれ毛がだいぶあった。肩に届くか届かないかというほどの、セミロングというヘアスタイルだ。

「夕ごはん、食べてかない？」

「息子と一緒じゃないのかね？」

「あの子、土日は家にいやしないわよ。学校から帰ってきたら、鉄砲玉ね」

「俺は、ゴルフの練習なんだ」

「また」

利江が笑った。この家へ来る時は、大抵ゴルフの練習だ。夕方には、家に戻ることになる。家族三人での食事、ということにこだわっているわけではない。むしろ、自分で引いている一線だった。その線を越えると、際限なく崩れていくような恐怖感がある。

「なにか飲む？」
「車だよ。酒はやめとく」
「お茶？」
「年寄りくさいな」
「お互いにね、いい歳じゃない」
私が三十八で、利江は三十五だった。十九の時に生んだという息子がひとりいる。その息子の名前さえ、私は訊いたことがない。
利江が、安楽椅子のそばの絨毯に、直に腰を降ろした。どこから逃げてきているのか、と私はふと思った。利江も私も、どこからか逃げてきている。
「絨毯、そろそろ貼り替えなくちゃなんないな。中年男の頭みたいになってきたわ」
私の頭髪は、決して多い方ではないが、禿げているというほどでもなかった。額の左右の生え際が、ちょっと後退しているという程度だ。
「仕事、うまくいってないの？」
「なぜ」
「二日も続けて、うちへ来るんだもん」
「仕事とは、関係なさそうだな」
テーブルの煙草に、私はチラリと眼をやった。セーラム・ライト。メンソール入りの煙草が、私は好きではなかった。それも、十ヵ月前までのことだ。

私の視線に気づいた利江が、これみよがしに煙草をくわえる。毒は適度に吸って躰を馴らした方がいい、というのが利江の意見だった。時折、誘うような煙草の喫い方をする。動じたことはなかった。やめたものは、やめたものだ。

「お茶、でいいわね」

私は頷いた。顔の前に流れてきたメンソールの煙を、掌で払う。

利江とは、二年続いていた。はじめは、息子を憚って都心のホテルで逢っていたが、ある時、利江の方が開き直った。自分に対して開き直ったのか、息子に対して開き直ったのかは、わからない。あの子も、ガールフレンドを部屋へ引っ張りこんでたわ。私が行くのをためらうと、利江はそう言った。ほとんど息子のことは喋らなかった。この家で、顔を合わせたこともない。

階下で、話声が聞えた。

若い男の声。息子が帰ってきたのだろう、と私は思った。話声は、低くしばらく続いていた。それから階段を駈けあがってくる音。利江の足音ではなかった。

部屋のドアを開閉する音がし、足音はまた下へ降りていった。

私は安楽椅子から腰をあげ、窓際に立った。ブルーのウインドブレイカーを着た少年の姿が、庭の横の道路を通りすぎていった。

「息子よ、うちの」

利江がそばに立った。もう少年の姿は見えない。

「高校二年生になったわ」

「この家、広すぎないか？」
「ひとりになったら、都心のマンションに引越すことにするわ」
「まだ、さきの話だろう」
「大学に入ったら、追い出してやるの」
低い声で、利江が笑った。
私は安楽椅子に戻り、テーブルのお茶に手を伸ばした。

2

都心のビルのワンフロアが、私の勤めている会社だった。本社の社員は百名に満たない程度だ。大会社に就職した大学の同期生より、肩書の出世はずっと早かった。営業部長ということになっているが、昨年からは取締役の肩書もついている。

十六年前、私がこの会社に就職した時は、社員二十名程度の、個人商店に毛のはえたような会社だった。社員規模で十倍、事業規模では三十倍以上の急成長をとげている。

私より十歳ほど年長の社長が、父親から事業を受け継いだ時、会社の展望は大きく開きはじめた。もともとは、工業用の洗剤を造っている小さな工場だった。現社長が、工場部門を切り離して全株出資の子会社とし、親会社は営業だけを取り扱うようになったのだ。私が入社したのは、ちょうど新しい営業体制が確立されようとしている時期だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com